

2020年10月

スクールカウンセラー：別宮 幸徳（べっく ゆきのり）

感染症と差別：どのように考えたらよいか

コロナウイルスの流行が長期化し、県内でも感染者が増えています。学校も例外ではなく、すでにいくつかの学校で感染者が発生したことが報道されています。感染が身近に迫ってくると生じやすいのが「差別」の問題です。そこで今回は感染症と差別について考えてみます。

【学校で感染が起きたとき、どのようなことが生じる可能性があるか】

◆ 感染した生徒や教職員が誰であるか探ろうとする

- ・憶測、噂、SNSによる拡散

感染が身近に迫ってくると当然不安になります。誰が感染したか特定したくなるでしょう。確かな情報がないことがさらに不安を煽るので、憶測が誇張されて広まりやすくなります。

◆ 感染した生徒（保護者）、教職員への攻撃＝差別

- ・感染に伴う再休校などによって、取り戻しかけた日常が奪われることへの怒り

誰が感染したか見当がつくと（事実であってもなくても）、今度はその誰かを攻撃することが始まります。感染した人のせいで日常が奪われたと腹が立つ（「あいつのせいで」）ことは、人間の性質として避け難いかもしれません。

◆ 感染に伴う再休校などによって、取り戻しかけた日常が奪われることへの反応

- ・学習意欲の低下 無気力 無力感 不信感
- ・自分自身も感染するのではないかという不安・恐怖
- ・登校への不安 特定の活動への不安

怒りの次に、日常生活が奪われることの結果として、無力感、不安感、恐怖感などに圧倒される状態になることもあり得ます。

◆ 学校外から詮索されることに対する不安

- ・差別される体験

自分は感染していなくても、学校の外部からは「感染した集団」に見えます。「感染が発生したのか」と外部から詮索されることは、自分が差別される体験と言えます。

【なぜ差別が起きるのか——感染に対する「不安」と「排除」の心理】

◆ 感染に対する不安（自分を守ろうとする気持ち）

- ・感染者を攻撃することで自分の不安と怒りを解消しようとする
- ・感染者を排除して、自分は感染していないし、これからも感染しない筈だと思おうとする

こうしたことが生じるのは、自分が感染する可能性を否定したいためです。不安を解消するため、世界を感染者／非感染者（白か黒か）に二分して考えます。感染した人や感染の疑いのある人をもはや仲間とは考えず、異質で危険なもの、「ゾンビ」のように見ているのです。

【どうしたら差別／排除を防ぐことができるか】

◆ 差別／排除につながるメカニズム

- ・コミュニティ（地域社会：学校も含む）が危機（感染症の流行）にうまく対応できず、危機対応が個人レベルにならざるを得ない状況

コミュニティに守ってもらえる感覚が持てないので、孤立した個人が自ら対処することになります。これはとても不安で孤立した心理状態です。

- ・個人が「自ら考える」ことができず、不安に駆られて集団に埋没し、集団全体が「感染者」＝「異分子」を排除する

不安で孤立した状態は耐え難いので、もはや個人として冷静に考えることができなくなって集団に埋もれてしまいます。そしてパニック状態となった集団全体が感染した人を排除します。そうなるのは、相互に支え合うというコミュニティのあり方が崩れ、個々ばらばらの個人が盲目的で衝動的なひとつの集合体になってしまうためです。

◆ どうしたら差別／排除を防ぐことができるか

- ・コミュニティのメンバーが、コミュニティによって守られているという感覚を持つことができるか

そのためには、緊急時に学校がどういう対応をするかを、予め学校が生徒のみなさんに伝えておくことが必要でしょう。

- ・差別／排除される側がどのような思いをするかを想像できるか＝「感染者」ではなく「人間」として考えることができるか

そのためには、ふだんから学校コミュニティのなかで、感染に対する不安について話し合い、考えを共有しておくことが鍵になります。そうすることで、自分たちがひとつのコミュニティであり、たがいに支え合うという感覚を持つことができます。